

巻頭言 第52回 日本赤十字社医学会総会

第52回日本赤十字社医学会総会を終えて

医療事業推進本部 本部長

とみた ひろき
富田 博樹

足利赤十字病院 小松本 悟院長の総会会長のもと、事務局を務められた足利赤十字病院の職員の皆様の総力を挙げた準備運営のおかげで、平成28年10月20日、21日の二日間、栃木県総合文化センター、宇都宮東武ホテルグランデでの学術集会和、ホテル東日本宇都宮における医療人の集いが、盛会に開催されました。

メインテーマの『医療の国際化 ～赤十字から発する患者安全～』を掲げ、参加者は1,525人に上り、759の演題が発表討議され、充実した総会となりました。

まず特筆すべきは、近衛社長の特別講演が実現したことです。近衛社長は14年前の副社長時代に、横浜で開催された第38回総会において、『救援活動における我が赤十字の役割』と題した講演をされたのを最後に、10年前に社長就任後も、7年前に連盟会長に選出されたことも相まって、ご多忙のため、医学会総会での講演を戴くことはかないませんでした。私は本医学会の理事長就任以来、赤十字職員が最も多く集まる本総会において、日赤社長として、そして連盟会長として、是非一度講演を戴きたいと願っておりました。会期の10月は、国内外赤十字関連会議、政府関連会議、国際会議など重要な会議が目白押し状態でしたが、様々な調整を行って戴き、奇跡的に講演が実現致しました。ご講演当日も、社長は議長を務められた中央防災会議を終えて、ご講演直前に会場に滑り込まれました。ご講演は 特別講話『赤十字から見た人道の世界地図』と題して、第一会場で行われ、医学会総会参加者のほぼ全員が出席する中で、約1時間にわたり、人道の実現に向けて世界の赤十字が取り組んでいる現状とその問題点について述べられました。世界の貧しい人々の生活は、確実に少しずつ改善に向かっていますが、宗教や民族の対立は消えることなく、難民・避難民は戦後最大の6千万人を越え、15億人が紛争下で不安定な生活を強いられている。近年増加が著しい自然災害の被害者は1億人を超えている。紛争地では中立を守って活動している赤十字の職員ですら攻撃の対象となる事例の出現など、常に新たな問題が浮上してきており、世界の赤十字が力を合わせて、人道の実現に向けて運動を続けてゆく必要があることを、連盟会長としての実体験をまじえて、ご講演をされました。社長のご講演を聴いた日赤職員達は、赤十字の職員であることの誇りと責務を改めて胸に刻んだことと思います。

特別講演Ⅰでは向井千秋先生による『宇宙医学から学ぶ健康長寿』と題して、研究成果を含めて、これからの社会への医学貢献について“宇宙医学は究極の予防医学”であり、高齢化社会を健康に生き抜くために有用であると強調されました。会場の最前列で聴いておられた向井先生のお母様はご高齢にも関わらず、大変にお元気な様子で、主治医の小松本院長のお陰ですとおっしゃっていたのが印象的でした。特別講演Ⅱでは400年式年大祭の斎行を終えた日光東照宮宮司稲葉久雄様が『平和の光は日光から』と題して講演されました。東照宮保全の苦労話から、世界遺産登録の経過、そして徳川家康公の平和主義など、歴史を論じながら現代に通じる特別講演でした。シンポジウム『iPS細胞の臨床応用の実際』は現代のiPS研究の第一人者が勢揃いし、そのup to dateにつき、わかりやすく解説され、先端研究の実際を知ることができる、贅沢なシンポジウムでした。これだけの演者を揃えることができた小松本会長のご努力と実力に、脱帽した次第です。JCIセッションもJCI vice president のChang氏と足利赤十字病院受審の際リーダーを務めた浦部副院長の講演が、JCIへの理解を深めたと思われました。

小松本会長のご厚意で、日赤病院グループの診療科別分科会の会場を提供戴き、5つの分科会（整形外科、脳外科、呼吸器科、婦人科、特定行為看護師研修）が開かれました。この分科会は日赤病院グループ内の診療科間の連携を強める目的で私が事業局長時代から推奨している取り組みであり、第49回（和歌山）から始めてこれで4回目となりました。

一般演題では、国内外救護活動、とくに熊本地震での活動の振り返りが熱気を運び、これから取り組まねばならない問題点を浮き彫りにしました。各診療科別、職種別テーマに加えて、医療安全、チーム医療、人材育成、職員教育など、病院運営に必須の横断的なテーマが多く発表され、研修医症例発表はますます内容が充実してきていました。看護部門の参加が大きな割合を占めてきていることは歓迎すべき事ですが、その中で看護助手・看護補助者からの業務改善などの演題が少なくないことが目を引きました。まさに赤十字全体の職員のための学会であることを、実感できる演題でした。

これらの中から優秀論文を選定することは、至難の業でしたが、厳選の結果、標記の通り10題が選ばれ、本号に掲載されています。

最後に、このような実り多い学会を準備し実行して下さった、足利赤十字病院小松本院長をはじめ職員の皆様に心から御礼申し上げます。